

正
誤
表

一〇頁	一〇行目	箸に棒にも↓箸にも棒にも
一一頁	七行目	海内の孤本↓中国も含め最も古い刊本
一三頁	一二行目	撒州↓漳州
	一七行目	撒州↓漳州
三二頁	一一行目	できないもの↓できないし
	一二行目	生きながら↓むざむざと
三三頁	一〇行目	〔女常〕↓婦
	一四行目	このようなけつこう↓このようにけつこうな
	一七行目	このような↓この
三四頁	五行目	けれども、↓ただ
	一〇行目	これは皆↓これも皆、

『唐通事心得』 訳注稿

木 津 祐 子

一、唐通事とは

唐通事とは、いうまでもなく江戸時代の中国語通訳のことをいう。主たる活躍の舞台は、江戸幕府の対外貿易港であった長崎で、オランダ通詞とともに、幕府の対外政策の最前線にあった。

唐通事の多くは、合法非合法を問わず、中国商人や亡命華人が平戸や長崎に定住帰化し、地役人として召し抱えられた者の子孫で、世襲的にその職務を担った。狭義の通事には、首席通事とも呼ぶべき大通事^{おおつうじ}、次席に小通事^{こつうじ}、さらに、その兼任職であった唐通事目付や唐年行司、また、両者の補佐役でその子弟のみが任官できる稽古通事がある。広義には、唐人屋敷詰めなど雑務一般をこなす内通事があったが、この内通事には現地日本人通事も多数含まれていた。後に通事の家が唐姓を有しているかどうか、彼らの身分や昇進を決定する重要な要素となり、それが内通事の身分にも適用されたため、なべて通事は積極的に唐姓を名乗るようになるのだが、それは通事家の世襲制をより強固なものにする一要因となったと思われる。唐通事に関しては、これまで大まかに二つの方向からの研究が為されてきた。一つは近世日本という枠組みの中で、その

歴史的・社会的役割を位置づけようとするもので、アプローチとしては、近世日本対外貿易史からと在日華僑史からとに大きく分類することができる。前者には、山脇悌二郎『近世日中貿易史の研究』（一九六〇年、吉川弘文館）、同『長崎の唐人貿易』（一九六四年、吉川弘文館）、劉序楓「清代前期の福建商人と長崎貿易」（『九州大学東洋史論集』一六、一九八八年）などが、後者には、中村質「鎖国時代の在日華僑——唐通事について」（『史学研究』七七・七八・七九合併号、一九六〇年）、李献璋『長崎唐人の研究』（一九九一年、親和銀行ふるさと振興基金会）などが挙げられよう。また、厳密には華僑史の角度ではないものの、宮田安『唐通事家系論攷』（一九七九年、長崎文献社）は、世襲を維持するため養子縁組みが繰り返され入り組んだ通事の家系を、彼らの墓記をもとに解き明かそうとしたものである。

もう一つは、学術面からの研究であるが、この方面の研究はそれほど進んでいるとは言いがたい。従来、江戸時代の学術史の側面から唐通事を論じようとする、もと長崎唐通事であった岡島冠山（一六七四—一七二八）が、『唐通事会所日録』や唐話学、また中国白話小説の移入に与えた諸影響を述べるのがそのほとんどであった。岡島冠山が、『唐通事会所日録』に「南京内通事岡島某某」とある岡島家に属する者だとすると、その出自は唐姓を持たぬ、つまり内通事以上の出世は到底望むことのできない日本人通事という立場であった。さらに、『唐通事会所日録』六、元禄十四年三月七日の条に「南京内通事之内岡島長左衛門と申者、近年逼迫仕候而渡世成兼申候二付、他國江罷出商賣之経営をも仕申度奉存候間、内通事役御暇之願仕申候二付、則組頭方より差出候願書二目付、年番より書付相添候而……」とあるが、冠山の別名が長左衛門であることからこの長左衛門が冠山と同一人物である可能性は高く、それならば、彼は唐人の末裔が実権を握る長崎で通事を続けることの限界を感じ、他國で商売をするという理由で転身を図ったと見なすことができよう。岡島冠山自身は、確かに非常に有能な人物であったが、つまりは長崎唐通事の本流とは見なし難いのである。

長崎で対中貿易の最前線にあって、中国語能力を発揮していた通事という職能集団そのものへの論及はというと、石崎又

造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（弘文堂、一九四〇年）や六角恒廣氏の一連の著述など、中国語教育・研究史の面から光を当てた著述があるにとどまる。そして、彼らがどのような中国語を話し、どのような意識で家伝の中国語を守っていたかについては、ほとんど過去に論じられた事はなかったとしてよい。

岡島冠山や荻生徂徠の唐話学とは別に、江戸時代にはもう一つの唐話学が存在したこと、そしてそれはより直接に隣国中国に向かった学問であったことを明らかにすることは、江戸時代日本の学術のみならず、域外に身をおいた華人にとっての自己同定と言語との関係、さらに社会言語学的には、祖先の言葉への忠誠心と技術としての家伝の言語との臨界面などの諸問題を考える手がかりを与えてくれるであろう。

本稿はその最初の手続きの一つとして、『唐通事心得』という、江戸時代長崎にあつて中国貿易の通訳に当たった唐通事の、文字どおり「心得」を記した教本を取り上げ、その翻訳を試みる。この教本の意義と通事の language loyalty（言語的忠誠心）の一側面については、拙論「唐通事の心得——ことばの伝承」（『興膳教授退官記念中国文学論集』所収、汲古書院、二〇〇〇年）を参照していただければ幸いである。

（注） この段の記述には、中村質「鎖国時代の在日華僑——唐通事について——」（『史学研究』七七・七八・七九合併号、一九六〇年）、及び李猷璋『長崎唐人の研究』（一九九一年、親和銀行ふるさと振興基金会）の記述に負う所が大きい。

二、『唐通事心得』について

『唐通事心得』は、長崎県立長崎図書館渡辺文庫所蔵で、管見の限りでは、他機関における蔵書は確認できない。写本で全十九葉、半葉あたり十行十八字、筆写年代及び筆写者は不明である。唯一の手がかりは、本文中（エピソードⅧ）に登場する旭如和尚が、田辺茂啓編『長崎実録大成』（宝暦十年「一七六〇年」）によれば、興福寺中興開山の隠元和尚から数えて五代めの住持で、正徳元年（一七一）から七年在位し、享保二年（一七一七）に、京都黄檗山の第十世継席となったとあることで、そのエピソードが和尚の在位期間から遠くない時期に記録されたと推測されるのみである。中国語白話文で書かれたその内容は、唐話の修練に勤めること、欲が深すぎてはいけないことなど、通事としての教訓が逸話集の体裁で具体的に生き生きと語られる。

『唐通事心得』とは別に、長崎図書館には『長短拾話唐話』（全四七葉）という、同様の教本が所蔵されている。書形は『唐通事心得』より若干小さく、書式も異なるが（十十二行十六字）、『唐通事心得』のエピソードのほとんどはこの『長短拾話唐話』（以下『唐話』）にも記録されている。こちらには「嘉永三年（一八五〇）」の書きつけが見られ、江戸後期の筆写であることがわかる。このようにエピソードの成立から百年を隔てた写本が存在することは、この書物が、通事の教本に相応しい内容として受け継がれてきたものであろうことを推測させる。いずれにせよ、十八十九世紀の長崎唐通事の唐話学習の有り様をよく伝える資料と考えてよからう。

以下に訳出するのは、この『唐通事心得』全文である。併せて語釈と、重要な事項への解説を付した。語釈には、必要に応じて中国白話小説の用例と、同時代の通事が学んだ唐話をよく伝える資料として、岡島冠山『唐話纂要』『唐語便覧』『唐話類纂』などのいわゆる「唐話辞書」に見える解説を記した。後者は長澤規矩也編『唐話辞書類集』（一九六九年）、汲古

書院）影印のものを用了。

原文は段落替えが一切無いが、ここでは内容によってエピソードⅠ～Ⅷまでに分割し小見出しをつけておいた。一エピソードが長い場合には、読みやすさを旨として、さらにいくつかの小段落に分割した。句読点は翻訳者による。筆写の誤りと思われる文字には、その字に続けて「」内に正しいと考えられる字を補った。また、『唐話』とでは一部言回しや用字が異なるものが見られるが、校勘はいちいち行わなかった。『唐通事心得』と『唐話』のどちらがよりオリジナルに近いかは俄かには判断できないものの、『唐話』には明らかな筆写の誤りが多く、それを別の手で訂正した箇所が、ほぼ『唐通事心得』の表記に一致することから、本稿では『唐通事心得』を基礎資料として採用した。但し、『唐通事心得』に字が缺けていたり、誤りと思われる箇所を『唐話』から補うことができる場合には、その旨本文中に注記した。

原文及び注の引用文は原則として原文のままであるが、一部、筆画の細部が原稿の活字と異なるものについては印刷の便を優先し表記を改めた箇所が有るが、いちいち注記することはしない。また、本資料では、「個・个・ヶ」、「裡・裏・里」などの文字はまったく区別なく用いているが、本稿はいまそれをもとの表記通りに書き分けた。

*

*

この『唐通事心得』は、唐通事について考える上で極めて重要な資料を我々に提供してくれる。特に、エピソードⅠ・Ⅱ・Ⅶ・Ⅷは、通事にとって存在理由ともいうことができる「言語」の問題について、職業・出自・方言・官話など、様々な問題と格闘する通事の姿が生き生きと語られるし、また、エピソードⅢ・Ⅷは、長崎という土地特有の問題から説き起こして、人生訓や唐話についての心構えを説くなど、長崎通事の現場によく即した内容となっている。

特に興味深いのは、彼らの自己同定の有り様であろう。祖先は中国某地の出身で、その言語（方言）に対しては高い忠誠心を持つべきではあるが、自らは日本人であって祖先から伝えられた言語は既に習得が難しくなっている、という現状認識、

さらに祖先の言語の継承者として自らを位置づけつつも、職務遂行上の有利さを考慮し、漳州語や福州語などではなく官話を習得することを目指すといった内容からは、その言語的忠誠心が「祖先のことば」から「職業のことば」へとシフトしていく様が浮き彫りになる。

Ⅲ～Ⅵは、直接言語にかかわる内容ではないのであるが、当時の人々が抱いていた道德意識がどのようなものであったかをよく伝え、中国における同種の教訓を綴った賞料と比べ、それが意外に現実的な側面を含むことに、思わず微笑むのは筆者一人ではあるまい。

本稿では、まずこの興味深い資料を全訳し、次なる研究の礎とすることを企図した。ここには、明清期の非中国語圏で書かれた中国語白話資料として、その用字・語彙・文法など、興味深い問題点を多く含むのであるが、全訳という性格、さらに紙幅の関係からも、専論に係わる問題には敢えて立ち入って論ずることをしなかった。それら諸問題については、以後稿を改めて論ずることとしたい。

三、『唐通事心得』訳注

I 「今時の若い者をめぐる問答」

(一) 據我看來、目下長崎の後生家、擔了個通事的虛名、不去務本、只看得頑要要緊、不但賦詩做文打不來、連唐話竟不會講。穿領長衣、插把好刀、只說自己上等的人、東也去耍子、西也去遊々蕩々、買酒買肉、只管花費銀子、撒撥得緊。這個大々不是了。說莫說、唐話是通事家的本等了。王家給他大々俸祿、教他做職事、難道特々送他花哄上用掉了不成。要是教他養父母、養妻養子了。倘若唐話也透徹明白、書也讀得爛熟、肚里大通、不消自己做門路、人々引薦、自然有個大前程。倘或

說話糊塗、要長也講不來、要短也說不來、這樣沒本事、那個肯擡舉、一生一世出頭不得。譬如做經紀的人先不先手裡有了兩分本錢、方纔做得先意。若是赤手空□（『唐話』作拳）沒有血本、悉聽爾怎麼樣會算盤、單々算得三七二十一也做不來了。通事家的學書講話是像個生意人的血本一般。爾說是不是。

私が見るところ、今時の長崎の若者は、通事という虚名をかさに、本分を疏かに、ひたすら遊ぶのが大事で、詩文を作ることも出来ないばかりか、唐話すらでんで話すことが出来ない。ぞろりとした羽織りを羽織り、結構な刀を腰に、自分を上等な人間と思ひこんで、東に行つては遊び、西に行つてはぶらぶらと、酒や肉を買つて、ただただ銀子を浪費して、道楽の上ない。これは大いに間違つてゐる。言うまでもなく、唐話は通事家の本分だ。お上がありがたい俸祿を下さり、仕事をおさせになるのも、まさかただ遊びに使つて有り金はたいてしまつたためな筈があるうか。大事なのは父母に孝養を尽くし、妻子を養ふことなのだ。もしも唐話をすつかり理解し、書物も十分に読み込んで、腹の中から完全に了解したならば、自分で出路を切り開くまでもなく、人々から引きが来て、自然と大きな前途が開けるものだ。もしも会話もでたらめで、長いことばも短いことばも話せない、この様なかいしよのないことでは、どこの誰がおまえなど引き立てようとするものか。一生目などではずがない。例えば、商売をする人間は、何はともあれまずは些かの元手が必要で、それで初めて商売ができる。もしも徒手空拳で元手がなければ、いくら算盤がうまかろうと、三七二十一の計算もできはしまい。通事家が書物を学び唐話を話すのは、商売人の元手と同じなのだ、そうは思わないかね。

【語注】

頑要

ふざけ、あそぶこと。『水滸傳』第二回「這人吹彈歌舞、刺槍使棒、相撲頑要、頗能詩書詞賦。」

耍子

『水滸傳』第二回「小官人若是不當村時、較量一棒耍子」。

撒撥得緊

この場合、甚しく道楽をすること。『水滸傳』第六回「只被廊下那幾箇老和尚吃酒撒撥、將錢養女」。

「得緊」は形容詞の後ろに続き、程度のはなはだしいことをいう。本資料では、Ⅱの「大得緊」「乖巧得緊」などしばしば見られる用法である。

王家

ご公儀、お上。

花哄

盛り場、時に遊郭を指す。「花関」とも。『二刻拍案驚奇』卷二七「柯陳兄弟多是山野之人、見此花関、怎不貪看」。

不消

不用、無須、「〳〵の必要はない」。

先不先

第一、首先、「何はともあれ」。

悉聽備怎麼樣

本来、存分に思いどおりに行うことをいうが、この場合は、後節にある「隨便備怎生」と同様に「たとえどんなに〳〵であろうとも」の意で用いられる。『鏡花縁』第六二回「如願住者、悉聽其便」。

(二) 備説的話都是有道理、句々打着後生家的心病了。如今學話的人、不論那一個、學了一年半載、曉得兩句眼前的俗語、將就兒打得來、只道是儘勾了、就托大起來。聽見有人家講話、縱或有些不通的、假活兒粧個都通得來、點頭點腦、胡亂答得一兩句。若是說話多一点、言來語去、露出破綻來。因為推个有事走開去了。這個算得還好些、更有一種最可憐的、明々在當面出醜了、木頭菩薩一樣開不得口、被人家恥笑了幾遭也不曉得恥辱、也不肯學、依旧懶惰過日子。

あなたの話は全くもつともで、一言一言が若い者の欠点をついています。いまの唐話を学ぶものは、どれを取っても、一年や半年ことばをまなび、二三句の日常会話を覚えて、適当に間に合えばそれでもう十分だといって図に乗ってしまう。誰かが話すのを聞いて、たとえわからないことがあっても、全部通じているふりを装って頷いてみせ、デタラメに一、二句返事をする。話が少々多くなり、あれこれ言っているうちに、破綻があらわになると、用事が有るとかこつけてその場を逃げ

去つてしまふ。これはまだましなほうで、もつと憐れなものになると、明らかに惨めな体たらく、木偶の坊みたいにも口も開くことができず、人に何度嘲笑されても恥を知らず、やはり勉強しようとせずに、相変わらず怠けた日を過ごしている。

【語注】

將就兒

適當につじつまを合わせる。『水滸傳』第二十一回「却說宗江坐在杌子上、只指望那婆娘似比先時、先來偎倚陪話、胡亂又將就幾時」。

儘勾了

「足夠了」に同じ。「十分である」。

托大

調子に乗る。『唐話類纂』卷一「托大　タカブル」。

假活兒

取り繕う。『唐話纂要』卷二「四字話」「假活兒説　イツハツテ云フ」。

因為

文脈からは、承前の結果を示す「所以」が相応しい。あるいは「因此」の意で用いたか。中国白話資料では「因為」のこのような用法はまず見られないが、本資料にはⅡ（二）・Ⅲ（一）・Ⅳ（三）・Ⅴ（一）・Ⅵ（一）・Ⅷ（第一の用例）など頻出する例である。

走開去

離れて行く。「開去」は動詞の後ろにつく方向補語で、「離れる」という動作の方向を示す。

遭

量詞。回数を示す。『水滸傳』第一回「如若心不志誠、空走一遭、亦難得見」。

木頭菩薩

木偶の坊、「菩薩」は人形をいう。『紅樓夢』第三十五回「你姨娘可憐兒的、不大說話、和木頭似的、公婆跟前就不獻好兒」。

（三）我□（『唐話』作們）懶惰、倒不懶惰。意思喜歡講唐話、但是口舌不利辨、沒有口才、況且生姓〔性〕駭鈍、一個笨東西了。所以雖然學得兩句也講不來。原來唐話是十分囉嘖、言語多得狠了。千言萬語、記也記不得許多。平上去入的四聲分

不清、糊々塗々の時節、就不通。還有開口呼撮口呼也要說得明白。不然、打掃（喉）嚨、隨便僮怎生高聲講也唐人聽不出。日本話是生成的、也還講不清、何況唐話、原來學々得了、這也怪不得。僮看自古到今、沒有幾個會講得、十個裡頭到有九個是不三不四的了。

我々が怠け者とおっしゃいますが、そうではないのです。気持ちには唐話を話すのが好きなのですが、舌も不器用で、弁も立たない、さらに生来愚鈍の大まぬけ。だから二三句学んでも使えないのです。それに唐話はもともと大変口数が多く、言い回しがたくさんあって、千も万も、憶えようとしてもそんなにたくさん憶えられるものじゃない。平上去入の四声も区別できず、あいまいであれば通じない。さらに、開口呼・撮口呼もはっきり発音しないといけません。そうでないと、せき払いをして、どんなに大きな声で話したところで、唐人には聞き取れないのです。日本語は生まれつきで、それでもきちんと話せないのですから、ましてや唐話などは、そもそもちょっと学んでそれでよしとするのも無理はありません。ほら、昔から、唐話をすっかり身につけたものなど何人もいはいしない、十人のうち九人は箸に棒にもかからないではないですか。

【語注】

囉唆

口数が多くてわずらわしい。「囉嗦」「囉嚇」とも。

隨便僮怎生

どんなに〜であろうとも。前出「悉聽僮怎麼樣」に同じ。

裡頭

〜の中、うち。

不三不四

まともでないこと。『水滸傳』第七回「這夥人不三不四、不肯近前來、莫不要擲洒家」。岡島冠山『唐話纂要』で、「半三不四、ドチニモツカヌ」と記録されるものがそれに当たる。

【解説】

平上去入の四声 ここで四声というのは、彼らが用いた声調が四調体系であったことを示すのではなく、直後に「開口

呼撮口呼」という宋以後盛んになる等韻学の知識と併せ、日本語を母語とする者が中国語を学ぶ時、その習得に最も困難な音韻特徴の代表として言及される。実際長崎通事がどのような声調体系の方言を学習したのかは、現時点では不明である。

開口呼撮口呼

開口呼は介音に $-i$ 、 $-u$ 、 $-ü$ 、などを含まない母音を持つ音節を指し、撮口呼は介音に $-ü$ を含むものを指す。これらは等韻学での概念に基づくが、等韻学の知識が日本でも悉曇学の移入とその成熟とともに早くから伝わっていたことは、等韻図の代表的著述である『韻鏡』が元禄期に日本で翻刻されたものが海内の孤本であることから知られる通り。

日本話

若き通事が、日本語を「生成（うまれつき）」のもの、唐話を「学」ぶもの、と対比していることに注意したい。Ⅱ（四）及びⅦにも同様の自己同定のあり方が窺える。

（四）僮不要講這等濃包一般沒志氣的話來。原來天下的事情、再沒有一個學不成。常言說得好、「天下無難事、都來心不專」。僮若死心踏地用工的時節、自然學到了。倘若浮々泛々不認真、悉聽僮掐虱子一般小可的事情也學不來了。不但是唐話、不拘什麼事體、都是一樣的。讀書、寫字、這等筆墨之事、且擱起不要講、連那個圍碁、着象棋、打双六、彈琴兒、學這樣的技藝也要留心。不然、如何學會了。因為做一個人、不要死搭々做那樣兒女的情態、要是志氣高強、□（『唐話』作發）起狠來、就是男子漢的事業了。縱或有些愚蠢的人、認一分真、聰明自然逼出來。

お前さんはそんなろくでなしのような志氣の無いことを言うもんじゃない。もともとこの世のことで学び取れないものなど一つも無い。いいことばがあるじゃないか、「この世に難しいことなどない、ただ心が集中しないのだ」と。必死で努力すれば、おのずと学ぶことができるのだ。フラフラと不真面目だと、たとえどんなにしらみをひねるような些細なことであ

ったとしても学ぶことはできないのだ。唐話だけではない、どんなものでもみな同じだ。書物を読むこと、字を書くこと、これら筆墨のことはしばらく置いて、あの囲碁や将棋、双六、琴を弾くといった芸事を学ぶにも心しなくてはいけない。そうでなければ、どうしてマスターすることができよう。だから一人の人間として、ぼんやりと女子供のような体たらくではいけない。志を高くもって、発憤する、これこそ男の事業である。たとえ少々愚鈍な人間でも、あと少し努力すれば、聡明さも自ずと湧き出てくるさ。

【語注】

濃包

人を罵る語。「ろくでなし」。「膿包」とも記す。岡島冠山『唐譯便覽』「大濃包能做甚事□ノラメガ、何コトヲカ能クイタサン」、『醒世姻縁傳』第二十回「這是兩個出尖的光棍、其外也還有幾個膿包、倚負這兩個凶人」。

死心踏地

決意が強固であることを形容する。「死心搭地」「死心倒地」「死心落地」などすべて同じ。

浮々泛々

ふらふらと不真面目なこと。『閑情偶寄』詞曲部下「勿使雷同、弗使浮泛」。

小可

普通のこと、並みのこと。『水滸傳』第七十四回「既是敢來劈牌、要做天下對手、不是小可的人」。

事體

ことがら。

摺起

置いておく。「起」は、現代語で「收起」（しまっておく）などと同じ働きの方向補語。

死搭搭

暫時用例が見当たらないが、おそらく「死拍拍」や「死紂紂」などのように生氣が無い様を形容する語であろう。

II 「ある漳州通事」

(一) 有一個漳州通事、年紀不過二十二歲、做人慷慨、志氣大得緊。聰明是不消說、百伶百利、問一知十、憑爾怎麼樣瑣碎的事情、半吞半吐、畧々說把他聽、他就會意了然明白、像個經過手的一樣。這幾天、到我家裏來學官話。他的主意、自己雖然會講漳州話、有公幹出去、見了外江人、說話不大通的時節、縱或有胆量、敢做敢爲、會得料理事情、也是礙手礙腳、未免做得不停當了。所以他學官話。他不過這兩日纔學起的、不但是講得大好、他學了一日、倒賽過別人家的學一年了。我(教)導他第一句話、第二句是他就自家牀諒得出、只當猜謎一樣的。有一個人問他說道、「爾原來漳州人的種、如今講外講(江)話、豈不是背了祖考、心上有些說不通了」。他原來乖巧得緊、大凡替人來往的書札、相待人家的說話、水來土掩、兵來槍當、着實應答得好。他回覆說道、「我雖然學講官話、那祖上的下南話、不是撇下了竟不講。這個話也會講、那個話也會講、方纔算得血性好漢、人家說的正是大丈夫了。口裡是說什麼話也使得、心不背祖宗就是了」。

ある漳州通事、年の頃は二十一、二歳、人格は高邁で大志を持ち、聰明はいうまでもなく、頭の回転が速くて一を聞いて十を知るタイプ、たとえどんな些細なことでも大まかに聞かせてやれば、まるで自分で経験したのと同様にすっぱりと了解する。ここ数日、我が家に来て官話を学んでいる。意図は、自分は撤州語は確かにできるのだが、公務に出て外江人(長江下流域の人)と会って話があまり通じないような時などは、度胸を決めていろいろ試し、何とか事を処理することはできて、やはり様々な障害があつてスムーズに事を進めるといわけにはいかない。そのため官話を学ぶことにした。彼は、ここ二三日の内にやっと勉強を始めたところだというのに、なかなかうまく話すだけでなく、一日学んだら、他の一年学んだ人間よりもうまいくらい。私が最初の一言を教えると、次のことは彼が自分で会得して、ちやうど謎解きのよう。ある人が彼に尋ねた。「君はもともと撤州人の出身なのに、今外江語を話そうとするのは、ご先祖様に背き、心情として申し開きができなくはないかね。」彼はもともとたいへん利口で、人と手紙のやりとりをしたり、話の応対をするにも、水が来れば

土で塞ぎ、兵が来れば槍で応戦する、全く立て板に水、という具合。次のように答えた。「私は官話を学んではいますが、ご先祖様の下南語も、捨ててもう話さない、というわけではありません。この言葉も話せる、あのことも話せる、という風であって始めて見所があるといえましょうし、人々も男の中の男、と言ってくれます。口ではどこの言葉を話してもよいのです。心では決して祖先に背かなければそれでよいのです」。

【語注】

不消説

不用説に同じ。言う必要がない。

説把他聽

「把」は「給」に同じ。香坂順一「中国近世語ノート」「清末短編小説のことば」(ともにいま『白話語彙の研究』一九八三年、白帝社)では、「把」のこのような用法を呉語もしくは(その影響を受けた)下江官話の特徴と論ずる。現代漢語方言では、このような動詞後置、また介詞の位置の「把」が、武漢(湖北)や淮陰(江蘇)・丹陽(江蘇)など南方官話及び長沙で話される湘語などでは「給」と同じ用法を有し、蘇洲・上海などの呉語で「拔」と表記される語がやはり「給」と同義で用いられるのがよく知られる(黄伯榮編『漢語方言語法類編』(青島出版社、一九九六年)第九章参照)。

公幹

公務のこと。『水滸傳』第十四回「都頭有甚公幹到這裏」。

停當

処置が妥当であることをいう。『水滸傳』第二六回「你得的錢帛、你們分了、都要停當」。

不過く才く

ほんのくにくしたばかりにすぎない。

賽過

くに勝る。『水滸傳』第三十九回「這廝無禮、他卻要賽過黃巢、不謀反待怎地？」

替人來往

「替」は、現代漢語では介詞の「給」に相当する。『水滸傳』第十五回「晁蓋道、你也這般纏、全不替我分憂」。

【解説】

官話

通常「官話」とは、原義的には、明の謝榛『四溟詩話』卷三に「及登甲科、学説官話、便作腔子、昂然非復在家之時」というように、「役人ことば」を指したのであったが、清朝に入り科挙を受ける者に予め官話を操る能力が求められ、広東・福建に正音書院と称する学校が設けられるようになるに伴い、官話に「正しいことば」または「都ことば」という含義が加わる。兪正燮『癸巳存稿』「官話」の条に「雍正六年、奉旨以福建・廣東人多不諳緩和、著地方官訓導、廷臣議以八年爲限、舉人・生員・貢・監・童生不諳官話者、不准送試」。また高静亭『正音撮要』序に「正音者俗所謂官話也」。日本では、『唐話纂要』卷三「五字話」「須要講官話 ミヤコ。コトバヲ。云フベシ」とあるように、「都ことば」と認識されていた。

漳州話

漳州は、近世日中貿易にとって重要な土地で、初期の来日貿易船の中では常に漳州船は大きな比重を占めていた。来日定住した唐人も多く、必然的に先祖が漳州出身の通事は数多い。現代方言区分では閩南語圏に属し、唐通事の職掌中では、同じく閩南語である泉州語と区別せずに用いられていた。

外江人

廣東語や福建語で「外江話」「外江佬」は、長江下流域で話されることば、またその地方の人々を指すことを参考にとすると、ここでは長江下流域から出港したいわゆる「口船（くちぶね）」の主たる構成員であった南京・浙江の人々を指すであろう。また、後出の「僑原來漳州人的種、如今講外江話、豈不是背了祖考、心上說不通了」という用法から、通事の中では、外江人の間で通用する言語が「外江語＝官話」という図式であったと推し量ることができる。

僑原來漳州人的種、如今講外江話、豈不是背了祖考、心上說不通了……

唐通事の言語的忠誠心を糾すことばである。唐通事の華人としてのアイデンティティに関しては、中村質「鎖国時代の在日華僑——唐通事について」(『史学研究』七七・七八・七九合併号、一九六〇年)などに既に論じられるところであるが、この箇所は、華人としての出自に基づいて「通事」という役職と責任を持つべき担当言語が用意されていたことを如実に物語る。しかしより興味深いのは、「我雖然學講官話、那祖上的下南話、不是撇下了竟不講。這個話也會講、那個話也會講、方纔算得血性好漢、人家說的正實大丈夫了。口裡是說甚麼話也使得、心不背祖宗就是了」という、祖先と祖先の言葉への忠誠心は肯定しつつも、職務遂行上より有効な官話を学ぶことは何ら恥ずべきことではないと断言する返答である。ここでは、祖先の言葉よりも、「通事」という職掌そのものへの忠誠心が推奨されていると考えてよいであろう。通事の華人意識の変遷をたどるうえで重要な記録といえる。なお、この問題については、拙論「唐通事の心得——ことばの伝承」(『興膳教授退官記念中国文学論集』、汲古書院、二〇〇〇年)において論じたので参照されたい。

下南話

漳州人としての先祖の言葉であるから、これは漳州語の属する「閩南語」を指す。

(二) 他今日來學話、一見了我、拜了八拜、口中千恩万謝、還要拜我一百拜的意思。我不曉得這個解說、當不起、連忙扶他起來、抱住身子阻當〔擋〕說道、「今日僮只管磕頭、不知什麼道理、沒有功勞、如何受僮的拜、有甚緣故、傾心剖胆說出來把我聽々。若是應當受僮的拜、大禮呢、就罷了。不然、僮如此亂磕頭的時節、摸不着頭路、坐在椅子上像個有芒刺一般、坐的屁股也不着實」。那時節他說道、「小弟昨日唐館裡值日、人々稱贊小弟說、這幾日說話講得好、比前頭差得大相懸涉。體面上多少好看了。這都是先生的大力、若不是先生的大才請教、如何能勾做得來。因為銘心鏤骨、感激不過的了」。

彼は今日も官話を学びに来たが、私に会うなり、続けざまにおじぎをし、千も万もの謝辞を述べ、まださらに百遍ほどもおじぎをしようとする気配であった。わたしは意味がわからずその様な扱いに堪えかねて、慌てて彼を抱き起こし、その体を抱えて遮って言った「今日あなたはひたすらおじぎをするばかりで一体どういうわけかね。手柄もなしに、どうしてあなたの礼を受けられよう。どういう理由か、腹を割って私に話して聞かせなさい。もしも確かにあなたの礼を受ける道理があるのなら大層な礼でもまあやむを得まい。そうでなければ、このような滅多やたらにおじぎをされると、立つ瀬がなく、椅子に座っても茨の上、尻が落ち着かないではないか」と。その時彼はいった。「私は、昨日唐人屋敷で当直でしたが、唐人がみな私を誉めて言うのです。ここ数日ことばがずいぶん上達しましたね。以前とは比べ物になりませんと。大変メンツが立ちました。これもみんな先生のお力です。もしも先生の素晴らしいお導きがなければどうしてこんなにできましたでしょうか。だから胸にしみて感激に堪えないのです」。

【語注】

只管

ひたすら。『唐話類纂』卷一「只管亂磕頭」、『水滸傳』第十二回「你不買便罷、只管纏人做甚麼」。

磕頭

おじぎをする。『唐話類纂』卷一「磕頭 唐人ノ礼ヲスルトキ地ヘカシラヲ三度ウチツケルコトアリ」という。

把我聽聽

ここでの「把」は使役の意で、現代漢語の「讓・給」に相当する。やはり南方諸方言の特徴に通ずる。

Ⅱ (一) の注を参照のこと。

大禮呢、就罷了

「呢」は、停頓の語氣を伝えるか。『紅樓夢』八回「有我呢、他不敢委曲了你」。本資料で「呢」の用例は極めて少ない。劉堅・江藍生等『近代漢語虛詞研究』p.176では、非疑問句でのこのような

「呢」は明代以前は北方語の特徴とされ、清代になると、南方官話でも疑問文での「呢」は徐々に使

われ出すものの、依然として非疑問句では「哩」が使われることが主流であつたと述べる。また、
Ⅲ (二) の注を参照のこと。

能勾

因為

可能を表わす。『水滸傳』第四回「想念如何能勾得見」。

この用例も前出のとおり「因此」の意で用いられる。

【解説】

唐館

元禄二年に、長崎十善寺村に造営された唐人屋敷を指す。それまで中国商人たちは、長崎市中に散宿が認められていた。『唐通事会所日録』三、元禄二年閏正月十六日に「右之序二、十善寺之儀、向後十善寺と申候而もいなものニ存候、上より名を御付ケ被成候にハ無之候、尤唐人町とも可被仰候へ共、夫ニてハ構（訳者注…唐人構、唐人屋敷ができるまでの仮設の収容施設）之詮無之候、就夫、あなたニハ向後唐人屋敷と御意可被成由被仰渡候、尤通事共も左様ニ相心得可申よし被仰渡候」。さらに同十八日には「中ケ間なかま不殘寄會、今度唐人屋敷江入申候内通事之儀、與頭中より下吟味仕、南京・福州方廿人、泉州・漳州方廿人、ノ四拾人書付出し申候を、又中ケ間遂吟味、右之内三拾人拔取、則銘々之名所付致し、其上南京・福州・漳州銘々存候口まで書付、一通ツ、御兩所へ差上ケ申候」とあり、唐人屋敷造営に伴い、あらたに四十人の内通事が採用されたことがわかる。

(三) 大凡做一個通事、不是輕易做得來。一則講唐話、二則學文、這兩樣要緊。但是平常的人是多也多得很了、才藝超過人家、出類拔群的人、篩眼裡頭隔出來的一般、十分難得了。雖然如此、這兩件是通事家的家常茶飯、不足為奇。單々會通兩句話、會拈〔沾〕筆頭也做不得。那算盤上歸乘除的算法、生意上摺〔増〕貨榮運的道理、世情上的冷煖高低、這等的事情、都

要明白、更兼有胆量、纔是做得大通事。若是小氣鼠胆的小丈夫、了〔『唐話』作夢〕裏也不要想做大通事。

およそ通事となるということは、軽々にできるものではない。一つには唐話を話すこと、二つには文章を学ぶこと、この二つは大変重要である。けれども並みの人間はたくさんいるが、才能技芸が、人なみはずれ群を抜いている人間は、ふるいの目に残すように珍しい。そうはいっても、この二つは通事家の普段の食事と同じで奇とするには足りない。単に二三句のことがでできるだけで、筆先を湿らすこともできないのは、そろばんでの掛け算割り算、商売で財貨を増やす方法、人情の寒暖高低、これらの事柄を全部はつきりさせねばならない上に、さらに根性も必要で、そうであって始めて大通事となれるのだ。もしも弱気な小人物であれば、夢にも大通事になろうなど思うものではない。

【語注】

篩眼裡頭隔出來 「篩眼」はふるいの目をいう。

(四) 前遭有一個大頭目見了一個通事、問他說道、「我看爾們同僚裡頭、也有的人、漳州話、福州話、外江話、都會講。原來才藝名一藝者少了。況且各人各有專門的事情、難道三樣的話都唐人一般會講不成、其中必竟也有說不清的。我且問爾、會講那里的話、會講下南話麼？」那時這個人回頭目說道、「大人見得極是、晚生從來口舌重鈍、說話不清不白、下南話打不來」。頭目又說道、「個麼福州話會講麼？」他答道、「也不會」。頭目說道、「既然（這）兩樣話不會、外江話自然會講了。他答道、「也不會」。那時頭目聽呆了一回說道、個麼究竟爾會講的是什麼話麼？」這個人原來乖巧、會講咲話、他不慌不忙、恭々敬々回覆說道、「晚生會講的是日本話了」。頭目聽說咲个不住、「好咲々々」。

先だって、ある大頭目が一人の通事に出会い訊ねた。「あなた方の同僚の中で、漳州語も福州語も外江語（官話）も全てできる人がいると伺いました。そもそも学問で一芸に秀でることも滅多にないことなのに、ましてやそれぞれ専門の領域が

有りながら、三つの言葉をすべて唐人さながらに話せるなどということが有るでしょうか。きつとうまく話せない言葉が有るに違いません。因みに伺いますが、あなたはどこの言葉が話せますか？下南語（閩南語）はできますか？」その時、その通事は頭目に答えて言った。「あなた様のご見解は全くもつともです。私はもともと口べたで、会話も不明瞭、下南語はできません」。頭目「それでは福州語はできますかな？」「それできません」。頭目「この二つの言葉ができないとなると、外江語は当然できることになりますな」。「いいえ、それできません」。その時、頭目はあきれて訊ねた。「それではあなたは一体何語が話せるのですか？」その通事はなかなか機転が利いて、冗談も得意であった。慌てず騒がず、恭しく答えるに「私ができるのは、日本語でございます」。頭目は聞いて笑い転げていった。「こいつはおもしろい」。

【注】

名一藝者少了

『唐話纂要』卷三「五字話六字話」「名一藝者少 一藝二名アル者少シ」。

个麼

それでは。現代漢語では「那麼」に相当する。このように「个（個・箇とも）」が指示代名詞の「這・那」の意で用いられるのは、白居易の詩などにも既に用例は見えるが、この用例からは、むしろ南方方言の色彩が伝わる。清代に成立した呉語小説『孽海花』十八回に「儂弄壞子俚大餐間一隻玻璃杯、俚倒勿答應、個末俚弄仔壞子佢公使夫人、倒弗翻淘」とあり、また現代諸方言の中でも、蘇州語の[kɛ̃˥˩˦˧˦]（近指）[kuẽ˥˩˦˧˦]（遠指）など呉語を中心に、指示代名詞に[k-]の語頭子音が現れる。

咲个不住

動詞後置の「个（個）」で、補語を導く性格を有す（丁聲樹『現代漢語語法講話』p.66～67）。『水滸傳』二回「端王接個不着、向人叢裏直滾到高俅身邊」。

好咲

こっけいだ、の意味であるが、ここでは貶意は薄く「おもしろい」という意味で理解してよからう。

【解説】

大頭目

この語が具体的にどのような役職の人間を指すのか、判然としない。恐らくは組頭などの役職、もしくは乙名^{おとな}など、唐通事も実態はそうであった長崎の地役人を指すかと思われる。ちなみに、『唐話』では、この大頭目が話しかけた相手の方は「唐年行司」となっている。

漳州話、福州話、外江話

漳州語・外江語については、前条に既出。福州語は、現在の方言区分では、福建省東部閩北方言に属し、通事的主要方言の一つであった。この条からは、通事がそれぞれ専門のことばを有していたことが見てとれる。この三者が代表する地域は長崎華人の三大出身地に該当し、それぞれの中心には所謂長崎三唐寺である福濟寺（寛永五年、一六二八年創建）・崇福寺（寛永六年、一六二九年創建）・興福寺（元和六年、一六二〇年創建）があった。

日本話

前条と関連づけて考えると、唐通事の華人としての言語的自己同定が相当の危機に瀕していることが伺える。彼らにとって、祖先の言葉である中国語は世襲によって伝承されている職業を守るために必修のものではあったが、既に日本語しかわからない、と冗談でも公言してはばからない事態に陥っていることが見て取れる。例えば、シンガポールの華人エリート層では、「家は中国某某の出身だが、自分はシンガポリアンである」という自己認識が主流であるといい（『シンガポールの言語と社会』第一章・第四章、大原始子、一九九七年、三元社）、唐通事の「先祖は某某の出身だが、自分は日本人である」という意識を理解するうえで参考になる。

Ⅲ 「錢が有れば神通力」

(一) 常言道、有錢可以通神、無錢隔壁聲。這兩句話正真說得體貼了。手裏有了銅錢、無論大事小事、都做得像意自由自在、沒有什麼罣礙。死的也活得來、活的也死得來。儼把銀子放光的時節、憑儼有權有威的大官府、也是自家的奴才一樣使得他走。銀子的神通是廣大得緊。所以說道、「有錢使得鬼走」。儼要叫一個鬼雜差雜使、略々送些黃白的東西、就來効勞。譬如儼替人打一个官司、明々自己理不是、破些少鈔、賄賂官府的時節、那官府(的)不管有道理沒道理、看銀子的面上、替儼用情判斷得不把儼吃虧了。若是單靠着兩分道理話道、「自己沒有虛心病、就是驚動官府、有甚麼可怕的、況且衙門是朝廷的公堂、公庭(的)之上、禮法之地、那里用得私弊。冤屈是冤屈、詐路是詐路、分個青紅皂白、自然老實判斷」。這樣本々分々、不用賄賂的時節、憑儼怎麼樣嘴頭利便、會得說話也說不響。那一場官司、應該贏的也輸了。因為人不可窮、々人十分受苦。

ことわざにも言うように、「錢が有れば神通力、錢がなければ壁に壁」。このことばは誠にもっともだ。手中に錢が有れば、大きなことでも小さなことでも、自由自在思いのままにやつてのけることができ、何の障礙も無くなる。死んだものも生き返るし、生きているものも殺すことができる。お金が威光を放つときには、權威あるお役所であっても、思う俥に自分の使用人同然に使い走りさせることもできる。錢の神通力は、とてつもなく大きい。だからいうのだ、錢があれば亡霊も手下と。この亡霊を雑用に使いたいと思つたら、山吹色をちよつと送つてやれば、すぐに効果は現れる。たとえば、お前さんが誰かに訴えられた時、明らかにこちらに理が無い時でも、少しばかり銀子を使い、賄賂を贈ると、お上のほうも道理のあるなしに関らず、銀子を目にすれば、お前さんに情けをかけて、決して損の無いようにさばいてくれる。もしも単にちよつとした道理に寄りかかつて、「自分にやましい所がなければ御上も動かす。何も怖れることはない、ましてや役所は朝廷の公堂、公庭は礼法の治める場、どうして袖の下など使えよう。冤罪は冤罪、詐欺は詐欺、はつきり白黒つけて、当然まっとうなお裁きがあるはず」などと、こんなふうにな正直に、賄賂を使わなければ、どんなに弁が立ち話がうまくても効果はない。

そのお裁きでは、勝つものも負けてしまうはずだ。だから人は貧乏をしてはいけない、貧乏人は損をする。

【語注】

有錢可以通神、無錢隔壁聾

『唐話纂要』卷三【常言】「有錢可以通神 錢サエアレハ通神モナル」

體貼

納得がいく。しつくり理解される。

罣礙

障害となる。「掛礙」も同じ。

有錢使得鬼走

『新刻官話彙解便覧』卷上「有錢使得鬼挨磨」、『土風録』卷十三「有錢使得鬼推磨」、など類似の表現が見られる。(ともに『明清俗語辭書集成』所收、汲古書院)

黄白的東西

お金をいう。「黄白」は「黄金白銀」のこと。

替人打一個官司

この「替」は「被・給」に相当し受け身を示す。Ⅱ(一)の注を参照のこと。「打官司」は裁判をすること。

替爾用情判斷

この「替」は「給」に相当、「ゝのために」。

不把爾吃虧了

ここでの「把」は介詞で「讓・給」の用法に相当する。やはり南方官話の特徴に通ずる。Ⅱ(一)の注を参考のこと。なお、『唐話類纂』卷一には「把爾喫 把爾ノ二字心ヤスキ人ニ云」という。

虚心病

びくびくすること。

青紅皂白

「皂」は黒のこと。つまり白黒をはっきりさせることをいう。

本々分々

本分を守り、まっとうであるさま。

嘴頭利便、會得說話

「嘴頭」は口のこと、主に話す能力についていう。『紅樓夢』第一百一回「那孩子模樣兒手兒都好、就只嘴頭子利害些」。また「利便」は「俐便」に同じ。『水滸傳』第八十一回「原來這李師師是個風塵妓女、水性的人、見了燕青這表人物、能言快説、口舌利便、倒有心看上他」。『唐譯便覽』一【へ字部】「口舌利辨、最能説話 ベンゼツガヨクテ、ヨフモノヲ云フ」。

因為

これも、「因此」の意で用いた例である。I (二) の注を参照。

(二) 譬如食量細、飲啖少。富貴人家這樣的時節、都說道、「是君子畧嘗滋味、少吃東西、生成這樣貴人相的了」。若是窮人家如此、便說道、「他命中沒有食緣、生成這樣窮相的了」。倘或食量大、飲啖多。富貴人這樣呢、都說道、「龍食虎啖是個貴人相、福也原、祿也厚、天生與他吃」。窮人家這樣的時節、畧豬身狗肚是個賤相、這樣吃法那得不窮。自然茶不茶、飯不飯、寒酸過日子」。一樣的相貌兩樣評品、備説受氣不受氣。所以我説、做一個人、不要貧窮、一窮々起來、就是親切的也生疎起來了、血脉相連的親眷也做冤家。就是曉得些義氣、心裏也雖然厭惡起來、但是沒甚緣故不好意思拒絕人、外貌假恭敬、來往幾年、後來一步步生疎起來。弄得後其間、他也不來、我也不去、大家都看破了。沒有一個親眷來往、只當土掘坑裡頭鑽出來的、一般、舉目無親、好不冷靜。

たとえば、食が細く飲み食いが少ない。お金持ちなら、このような時、たいてい「君子は少々^なの滋養を嘗め少ししか物を食べないから、生まれつきこのような貴人の福相なのだ」ということになる。これが貧乏人であれば、「彼の命には食い物のご縁が無いから、生まれつきこんなみっちり相なのだ」ということになる。食べる量が多く飲み食いが旺盛。金持ちがこのようであれば「龍食虎啖は貴人相、福もたっぷり、祿もたっぷり、お天道様がたっぷりおまんまをくださる」というこ

とになる。貧乏人がこのような時には、「猪身狗肚は賤しい相、こんな食べ方なら貧乏も道理、茶でもないものを茶とし、飯とはいえないものを飯とし、辛い日々を過ごすのも当たり前だ」となる。同じような様相でも二つの評価、なんと不公平なことではないか。だから私が思うに、一人の人間として、貧乏ではいけない、いったん貧乏になれば、仲の良い者も疎遠になり、血のつながった親戚でも仇となる。少しばかりの正義があれば、心の中でいやになり始めても、理由もなしに人を拒むのは申し訳ないと、外見上は慇懃に振る舞いはしても、何年も付き合う内に、後にはだんだん疎遠になっていく。随分経ってみれば、彼も来ない、私も行かず、他人も皆それを見破るようになる。一人の親戚も付き合わない、ひたすら穴蔵を掘って抜け出てみるようなもので、目を挙げて見回すと知り合いは一人もいない、何と寂しいことだろう。

【語注】

富貴人這樣呢 「呢」は、直前の「富貴人家這樣的時節」に対応する句に用いられていることからすると、やはり前出と同様疑問の語気ではなく、句中での停顿・仮定の語気を示す「呢」の用法であろう。「〜という」と。

與他吃

彼に食べさせる。

那得

反問の疑問代名詞。

受氣

侮辱をうけること。『水滸傳』第七回「男子漢空有一身本事、不遇明主、屈沈在小人之下、受這般腌臢的氣」。

IV 「欲深きは禁物——長崎財主伊東」

(二) 大凡人家一飲一酌、都是前定、沒有可以勉強求得來的道理。所以「前定」兩個字冷淡了許多覬覦的念頭、消磨了多

少爆燥の手脚。不曉得前定の人、一下有了要求的念頭、後來指望到手、一下到了手、後來只管要求、不管因該做得因該做不得、妄求非福、被貪心絆住了、想不到道理上做出不公不法的勾當來、直到後頭收煞不住的時節、方纔懊悔、這也遲了。譬如做生意的人、拿了自家本錢也要等他運氣亨通、機緣湊巧、不論在家裡走水、整千論萬來撰銀子。若是時運不通、緣法不湊、要撰三厘半（分）文、費了偌大的精神、還不能勾。莫說三厘半文、連那自家的本錢還有折得精空了。

およそ、人には一杯飲むにも「前定」（あらかじめ定められた運命）があつて、無理矢理に求めようとして得られる道理などはない。だから「前定」の二文字はさまざまな高望みを諦めさせ、相当の苛々する手足（体）をやわらげてくれる。「前定」を了解しない人間は、ひとたび要求する気持ちが生じて、のちにそれが現実のものになり、手中に入るや、後からはひたすら要求するようになって、なし得るはずのものかそうでないかに関らず、自分の福ではないことをみだりに求め、貪る心根にとらわれ、道理の上で公でも法でもないことをしていることに思い至らず、後になって始末がつかないような事態になって、ようやく後悔しても、それは遅いというものだ。たとえば、商売をする人間は、自分で元手を持っていても、運が通じ、チャンスがめぐってくるのを待てば、家から火事が出ようと、何千何万も銀子を稼ぐことができる。もしも運が通ぜず、機縁が巡ってこなければ、三厘半文をかせぐのに、膨大な力を費やしても、かなわない。三厘半文とはいわず、自分の元手でさえも、すっからかんにすってしまふのだ。

【語注】

覬覦

不相応な望みを抱くこと。そもそも『左傳』桓公二年に見える語。

爆燥

いらいらする衝動。「暴躁」に同じ。『西遊記』第十五回「行者見他哭將起來、他那里忍得住暴燥、發聲喊道、師父莫要這等膿包形麼」。

因該

「應該」のことであろう。n 韻尾の「因」とり韻尾の「應」を混同することから、通事の学んだ唐

話が両者を区別しない方言であつたことが見て取れる。

勾當

事情、こと。『水滸傳』第十八回「這是太師府差干辦來立等要回話的勾當」。

收煞

場を収める、収めどころ。「收殺」も同じ。『朱子語類』卷二十九「論語十一」「狂簡底人、做來做去沒收殺、便流入異端」。

走水

火事、または帳簿を管理する。ここでは「火事」の意に解釈したが、後者であるなら「家で帳簿をつけていても」となる。『紅樓夢』三十九回「南院馬棚裏走了水、不相干、已經救下去了」。

偌大

こんなにも大きい。『水滸傳』第二回「胡說！偌大一個少華山、恁地廣闊、不信沒有個獐兒兔兒」。

折得精空

「折」は失うこと。「精空」はすつからかん。「精光」に同じ。

(二) 原來平戸地方是時常唐船來飄流、所以那地方的王家吩咐做公的人發幾個哨船晝夜巡河。但凡別處地方的人過往自己管

下的所(以)在、不論甚麼船都要盤結(詰)、問明白了來頭、或者做生意、或者到什麼所在去、來歷明白、沒有私弊、方纔

許他過去。若是來頭不明白、說話裡頭有半點糊塗不明白、就拿住他見了官、好不囉嘖。聞得說、前遭捉着了做私貨的船、々

上單々有三個人、一個是對馬地方的人、兩個是長崎人。船上有幾個頭盔衣甲、弓箭刀鎗、這等的軍器、還有朝鮮出的人參五拾斤。這三個人是三年前瞞了人家暗々の買備些軍器、到朝鮮去買人參、在那里擔擱了三年、剛々這遭回來。回路上大着胆、不會防備、青天白日走過平戸港口、被那哨船捉拏了。說便是這等話。

もと平戸地方にはしばしば唐船が漂流してきたものだ。そのため平戸の領主が役人にいつけて巡視船を出し、晝夜巡回させていた。およそ他所の人がやってきて自分の所轄の場所になると、それがどこの船であろうと、必ず係留し、来た理由を問い質し、商売なのか、どこかに行こうとするのか、由来が明らかになって不正が無ければ、ようやく通過が許される。

もしも来た理由が不明瞭で、話の中に少しでも曖昧ではつきりしないところが有れば、引っ捕らえて御上にさし出す。何と厄介なことか。聞くところでは、先ごろ、抜き荷の船を捕まえてみると、船の上にはたった三人しかおらず、一人は対馬の人間で、二人は長崎の人間であつた。船上には幾つかの甲冑や鎧、弓矢や刀槍などの兵器と、朝鮮産の人参五十斤が有つた。これら三人は、三年前に人を欺いてこつそりと兵器を買い揃え、朝鮮に行つて人参を買い、そこで三年とどまつて、この度帰つて来たばかりであつた。帰り道で気が大きくなって、防備もせずに堂々と平戸の港口を通り過ぎ、巡視船に取り押さえられたのだ。話せばつまりこういうことだ。

【語注】

管下

「管轄」に同じ。

盤結〔詰〕

詳細に調査し問い質すこと。『水滸傳』第八十一回「但有外郷客人出入、好生盤詰」。

來頭

來歴、理由や背景。

所在

場所の意で用いられる。現代漢語の「地方」に該当。

私弊

悪事、具体的には密貿易を指す。これは当時の幕府のご法度であつた。

糊塗／含糊

ともに「ぼんやりしている、曖昧である」の意。

囉唖

前出のとおり、口数が多く面倒なことをいうが、ここでは厄介なことを形容するのに用いられる。

私貨

密貿易。

擔摺

もたもたすること。「擔摺」も同じ。『水滸傳』第二十回「今夜月色必然明朗、你便可回山寨去、莫在此擔摺」。

【解説】

平戸地方

日本の対外貿易港が長崎に限定される以前の重要な対外貿易港の一つ。フランシスコ・ザビエルが一五五〇年、鹿児島から平戸に拠点を移し、それ以後ポルトガル・イギリス・オランダとの交易、また対明貿易の拠点であった。イギリスやオランダの商館が置かれ、また「後期倭寇」の根拠地でもあった。鄭成功が平戸で出生したことはあまりにも有名。また、平戸には多くの唐通事があったが、江戸幕府により、対外貿易港が長崎に集中されると、彼らも平戸から長崎に移住を余儀なくされた。

(三) 原來做了不公不法的事情、雖眼下逃得姓〔性〕命、究竟逃不過。憑備怎生半夜三更黑暗々地、鐵桶一樣做準備、也是上天不肯饒恕、因為常言說道、人善人欺天不欺、人惡人怕天不怕。自從當初如今犯法的人、再沒有逃得過、這一遭難爲那地方的王家破費了銀糧、打發幾十個大頭目小頭目等押解犯人、送到長崎來審問。想必早晚解送來了。聞得說、幾十年前、長崎有乙個大財主、姓叫做伊東。原來做私貨是這個財主纔起頭。他也帶了軍器、到朝鮮去買貨。後來有人首告、露出馬腳來、被王家問罪了。當初是紅毛船、唐船做私貨年々有的。朝鮮去做私貨的、除了伊東、單々這乙遭的三個夥計了。這三個人的罪犯非同小可、重也重到脫底頭的了。為何呢？兵器是日本大々犯禁的東西、半盞片甲也不許私下買與他唐山人。諒來這三個人明日問了大罪、老大吃苦的了。

もともと、不公正なことをしたからには、たとえ今回命はながらえても、結局は逃げおおせない。どんなに真夜中の真っ暗闇に乗じて、鋼鉄の桶のような準備をしても、お天道様は許してはくたさらない。だから言うではないか、「善人であれば、人は裏切っても天は裏切らない、悪人であれば、人は恐れても天は容赦しない」と。最初から今回罪を犯した連中は逃げおおせはしなかったのだ。このたびあそこの領主が資金を投じて、何十人もの大頭目小頭目らを派遣したおかげで犯人を

取押さえ、長崎に送り届けて尋問させるのだ。思うに、遅かれ早かれ護送されてくるだろう。話に聞く所に、何十年前、長崎に一人の大富豪がいて、名は伊東といった。もともと密貿易はこの富豪から始まった。彼も兵器を携え、朝鮮に行つて荷を仕入れた。後に密告する人がいて悪事が発覚し、領主に罪を問われたのだ。当初は、紅毛船、唐船で密貿易をするものは毎年のように有った。しかし朝鮮に行つて密貿易をしたのは、伊東をのぞけば、今回の三人の輩がいるだけだ。この三人の罪は並のことではなく、重大といえどこれほど重大な罪はない。どうしてか。兵器は日本ではくれぐれもご法度のもので、甲冑のかけらでも竊かにかの中国人へ売却するのは許されない。思うに、この三人は、明日にもその大罪を問われ、きっと大変なことになるだろう。

【語注】

因為

これも「因此」に同義の用例。

人善人欺天不欺、人惡人怕天不怕

『唐話纂要』三【常言】「人可欺、天不可欺 人ヲバ欺クトモ、天ハ欺レヌモノナリ」、「人可瞞、天不可瞞 人ヲバダマカストモ天ハダマカサレヌ」。

押解

逮捕し連行すること。

起頭

先鞭をつける。始める。『水滸傳』第三十四回「宋江却把自離鄆城縣起頭、直至劉知寨拷打的事故、從頭對秦明說了一遍」。

紅毛船

オランダ船のこと。

夥計

雇われ人。一味、協力者。「伙計」とも表記する。『紅樓夢』第七十四回「說他和他妹子是伙計、雖然他妹子出名、其實賺了錢兩個人平分」。

非同小可

尋常ではない。『水滸傳』第一回「只見穴内刮刺刺一聲響亮、那響非同小可」。

為何呢

ここでの「呢」は、疑問の語氣を伝える。『儒林外史』第二十三回「為什麼要打我呢？」

(四) 原來酒色財氣、這四個字大誤了人。做一ヶ人立身在世間、名利兩個字雖然丟不掉、將就些自然無沒事了。只顧貪圖不肯罷休、所以弄出事來、活々送了一條姓〔性〕命。豈不可惜。他那伊東到朝鮮去、不止一遭兩遭、一連去了十三遭、到了第十三遭、方纔露出來。單々走一待也撰錢不少、何況十三遭老大掘藏了。論起伊東的家事來、長崎算得第一个大財主、家裡銀子推放不起、說來坑廁上、都是銀子的。這樣豪富有什麼不像意、又要貪財、做那樣欺公犯法的勾當、這也罷了。一連去撰錢、就是因該歇了。為什麼只管累次去、不曉得收拾。若是走了四五遭就歇了、再沒有人得知、自然好々過日子。那有死在刀鎗之下。這都是自家惹出來的、快〔怪〕不得人家了。

そもそも酒・色・財・氣の四文字は人を大いに過あやまたせる。一人の人間として世に立とうとするなら、名利の二文字は、捨てることはできないものの、適當であれば當然何という問題も無い。しかしひたすら貪欲に、止めることを承知しなければ、事を引き起こして、生きながら命を落とすことになる。何と残念なことであろう。あの伊東も朝鮮に出かけたのは、一度や二度のことではない。連続して十三回も出かけ、その十三回目に發覺したのだ。一度出かけるだけでも結構な金が稼げるのだから、ましてや十三回では大いに貯えを増やしたことだろう。伊東の家について言うと、長崎ではまあ第一の大富豪といつていいだろう。家には銀子が置く場所のないほど有る。噂では、厠にも、たつぷり銀子があるそうだ。このような富豪で何の意のままにならぬことがある。さらに財を貪りたくて、公義に背くあんな事態を起こすのなら、それもやむを得まい。続けて金儲けに行ったなら、当然そこで止めるべきだ。どうして何度も重ねて行つて、納めどころをわきまえなかったか。もしも四五回行つて止めていたら、誰にも知られず、おのずと結構な日を過ごせ、打ち首になるようなことはなかったのに。

これは皆自分で招いたことで、人のせいにはできない。

【語注】

將就些

I (二) の注「將就兒」を参照のこと。『唐話便覽』二【才字部】「將就些罷了 大方ニシテ打ヲケ」。

罷休

止やめにする。

走一待

量詞としてのこのような「待」の用例は見出しがたい。「待」は恐らく「得」の誤りと思われる。『唐話類纂』卷一に「走一得 ヒトツ行ト云コト 一度様ノコト」とあるのが参考となる。

掘藏

財宝を掘り当てること。

坑廁

「坑」は、呉語や閩語などで現代でも廁の意味で用いられる。白話小説では「毛坑」(茅坑)は見られるものの「坑廁」での用例は無い。

快〔怪〕不得

怪しむに足りぬ。「快(普通話拼音 kuai)」と「怪(guai)」の語頭子音は、有気音と無気音の違いを有し、中国語ではいかなる方言であろうとまず混同されることは無い。一方、有気音と無気音の対立をもたない日本語を母語とする人間は、しばしばこの両者を区別することができない。

(五) 雖然如此、也有一說。古人道、唐王去求仙、彭祖祝壽長、嫦娥嫌貌醜、石崇謙無田、這四句是人家貪心不足的意思。爾也讀過書的、不消我解說、自然明白。頭一句的意思是做皇帝的也有指望的念頭、譬如滿天下裡頭、除了萬歲老爺還有那个更快活、富貴榮華受用不盡、要長就長、要短就短、那一樁事情不如意、那一件東西不全備、這樣快活也是唐朝的皇帝自然還要做仙學。做仙人的修煉、駕了雲、騎了鶴、自由自在要快活。那二句的、彭祖是十分命長、活了八百來歲、也還要人賀

壽、再要活幾百歲。據他下界的人看起來、這八百歲是長也長到酩酊的了。人生七十古來稀、活了七八十歲也還算得出奇、何況八百歲、整千論萬也難得有一個這樣有壽的人。雖然如此、那彭祖把這樣八百歲還看得不長。第三句的嫦娥是原來天女、所以面貌生得標致、千嬌百媚、美也美得狠、透頂也還說道醜陋、只管抹了胭脂、搽了脂粉、一味梳洗了。那四句的石崇是天下有名的大富貴人、万々貫的家私、家裏不知有多少良〔銀〕子、沒人曉得。也還想要良子、人家稱贊他手頭好、他回覆說道、手裏沒甚許多銀子、不過買得幾畝田糊口而已。若是石崇的家私差不多的、人家那里這樣景仰他。自古到今、說一個富貴的話、憑儻三四歲的小娃子、也說石崇一般的家私、連皇帝也壓倒了。做一個財主、也是照伊東那樣犯了法度、何況窮人家、當一件吃一件、過不得日子的、自然思量要做歹事了。原來做一個人、不論那一个都是有良心。肚裏通不通、良心是不昧的了。儻看那一夥做強盜的人、都是識字、筆下也來得。但是一味打劫了人家的東西、結果了人家的姓〔性〕命、這都是家裡窮苦、餓死不得、所以無可奈何、做這樣狠巴巴的事情、不是沒良心的了。

そうはいっても、また別の見方がある。昔の人は言っている、「唐王は仙を求めに行き、彭祖は壽の長きを祝い、一女當娥は貌の醜きを嫌い、石崇は田無きを嫌う」と。この四句は、人の貪欲できりのないことをいう。あなたも学問をした人間だから、私の解説を待つまでもなく当然ご存じでしょうが、最初の一句の意味は皇帝であつても慾をもつことがあるということ、たとえば天下の中でも、万歳老爺を除いてはこれより愉快なものなど無く、富貴榮華も限りなく享受でき、長ければ長く、短がければ短く、思い通りにならぬことなど何もなく、完璧でないものなど何もない。このようなけっこう唐の皇帝でも、やはり仙学を学ぼうとする。仙人になるための修練では、雲に乗ったり鶴にまたがったり、自由自在に愉快に過ごすのだ。二句めの意味とは、彭祖はそもそも随分の長命で、八百歳まで生きていながら、まだ長寿を求め、さらに数百歳生きたいと願う。他の下界の人から見れば、このような八百歳でも気が遠くなるほど長生きだ。人生七十歳は古来より稀で、七、八十歳でも大変珍しいことといえるのに、ましてや八百歳など、どんなに多く見積もってもその様な長寿の人は有

り得まい。そうはいっても、彭祖はその八百歳もまだ十分とは思わなかったのだ。第三句の嫦娥は本来天女で、容貌が生まれつき美しく、千嬌百媚、美しさといったらこれ以上はいくらでも醜いと思い、ひたすら紅を点し白粉をはたき、一途に髪を梳く。四句目の石崇は天下に有名な大富豪で、何万貫もの家財をもち、家には一体どれほどの銀子が有るか、知っているものは誰もいない。それでもまだ銀子が欲しい。人が彼の資産の素晴らしさを誉めると、彼は答えて言う、手元にはそんなに多くの銀子はありません、けれども、何畝かの田畑を買って口に糊するのみです、と。もしも石崇の家財がそこそこであれば、人はどうしてこれほど敬慕しようか。昔から今まで、富貴ということを言う時、三四歳の子供でも、石崇ほどの家財は皇帝であつても圧倒する、と言つたものだ。一人の金持ちでも、伊東のように法を犯す、いわんや貧乏人をや。その日その日でおまんまを食べ、日が過ぎせないなら、当然悪事を思い巡らすものだ。そもそも一人の人間としては、だれでも皆良心が有る。腹の中が通じようと通じまいと、良心は迷わない。ほら、あの強盗を働く人間はみな文字も知っているし、文字も書ける。しかし一途に人の物を強奪し、人の命も終わりにしてしまふ。これは皆家が困窮して餓死するしかない、だからやむを得ずにこの様な凶悪な事をしたのであつて、良心が無いということではないのだ。

【語注】

快活

愉快であること。『唐話類纂』卷一「好快活　ヨイ心モチジャ」

所以面貌生得標致

ここでの「所以」は理由を導く用例であつて、現代語の「因為」の用法に近い。前出の「因為」因此とまさに相對應する例である。

透頂

最高、極端なこと。

一味

ひたすら。

家私

家財。『水滸傳』第五十一回「況兼我又無父母掛念、家私盡可賠償」。

手頭

本来身辺を示す語であるが、転じて資産や力量などを表わす。『孽海花』第五回「那東西混帳極了、

兄弟不過一時手頭不便、欠了他幾個臭錢」。

過不得

過ごすことができない。「不得」は可能補語。

狠巴々

極悪非道なこと。

V 「大徹大悟の善知識」

(二) 昨晚有一個朋友到我家裏來講談、恰好我也閑空在家、因為留他坐了半夜講閑話。他那個朋友做人忠原、況且十分信佛、燒清好香、吃苦茶過日子。人會念經、法華經、金剛經、不拘什麼佛經、都念得下來、像個和尚一樣的。他每日早起到寺裡燒香、一年三百六十天、沒有一日不燒香。聽他說、昨日清早起來梳洗完了、打帳寺裡去燒香、穿了衣裳將要出門的時節、只見一個老僧、年紀將近六七十歲、十分貧窮、身上穿了一件腌々臘々の旧衣裳、外面舊道袍、這道袍也稀破、逐縷々開了、却似個簑衣一般。那個老僧原是曉得相識這ヶ朋友、要替他作揖、爭奈那袖子只有半截、左扯也蓋不來手、右扯也遮不着臂、只得抄着手。口裏說道、「居士為什麼寺裡去的暗了、莫非失曉了麼。貧僧今天出來托鉢、所以失迎了。吩咐沙彌泡一壺好茶、等居士隨喜、快些去吃茶罷」。

昨夜ある友人が話をしに我が家に訪ねてきた。ちょうど私も暇で家にいたので、彼を引き止めて夜中までおしゃべりをした。その友人は性格は忠実、さらに大變仏を信心していた。上等のお線香を供えながらも、自分是不味いお茶を飲んで日を過ごしていた。お経を上げるのもうまく、法華經・金剛經、どんなお経でもちゃんと上げることができ、まるで僧のようであった。彼は毎朝早朝に寺に行ってお参りをする。一年三百六十日、一日たりとも参らない日はない。彼が言うには、昨日

早朝に起きて身だしなみを整え、寺にお参りしようと考えて、服を着替えてまきに出かけようとした時、一人の、年の頃は六、七十歳になろうという老僧を目にした。これがたいそう困窮した身なりで、よれよれの古い着物を着て外には古びた法衣、この法衣がまたぼろぼろで、糸がほつれて穴だらけ、まるで簀のよう。その老僧はもともこの友人の知り合いで彼におじぎをしようとしたが、いかんともしがたいことに、袖は半分で切れていて、左を引っ張っても手が隠れない、右を引っ張ってもかいたを蔽えず、腕を組むことしかできなかった。そして言うには、「居士はどうして寺に来られるのが遅れたのですか。まさか忘れられたのではないでしょうね。私めは今日は托鉢に出かけて、お迎えできません。小僧に良いお茶を淹れて、居士の参詣をお待ちするようお願いしておきました。早くお茶を飲みに行かれなされ」。

【語注】

恰好我也閑空在家、因為留他坐了半夜講閑話

「留他坐了半夜講閑話」は、紛れもなく「恰好我也閑空在家」という理由を受けた結果となっており、この「因為」が、承前の結果を示す「所以・因此」の意であることを明白に物語る。

忠原

『唐話』は「忠厚」に作る。恐らくそれが正しい。

打帳

「打算」に同じ。『初刻拍案驚奇』卷三五「就起一點心、打帳要頼他的」。

腌々臘々

汚らしい。『董解元西廂記』卷七「鬢邊蟻蝨渾如糝、你尋思大小大腌臘」。また、ここと同じ四字句は、『唐話類纂』卷一「腌々臘々 キタナイ」。

縷々閑

糸がほつける。

爭奈

いかんともしがたいことに。「無奈」に同じ。『水滸傳』第七回「既蒙到我寒舍、本當草酌三盃、爭奈一時不能周備」。

抄著手

両手を袖の中に入れる意と、手を胸の前で組む両義があるが、袖がほつけていて手を被えない、というのであるから、ここは手を胸の前で組むと解した。

去的暗了

「的」は「得」に同じ。様態補語を導く。

吩咐

言いつける。

隨喜

参拝すること。『水滸傳』第四十五回「敝寺新造水陸堂、也要來請賢妹隨喜、只恐節級見怪。」

(二) 原來這個和尚是有一ヶ寺裡的住持、寺裡香火興旺、有許多壇越時常送柴送米、只管供養。所以不消買米糧、寺裏雖有幾十ヶ僧衆都是溫飽有餘了、沒有托鉢、又沒有化緣、也過得去。這是菩薩的光明了。但是這ヶ和尚大徹大悟的善知識、曉得過去未來的事情、看破了世情、看得世態「態」水一樣冰冷不過、往常不論出門不出門、都穿着舊衣、不肯穿着好衣裳。若是壇越送一件衣服、送些銀子、再沒有畜在手裏、銀子是把日用的東西使費扣下來、剩下的無論多少、都散送了周濟窮人家、衣服也是自己穿得不冷不寒、餘下的都送把人家穿。到方丈裏去看、沒有什麼家伙、不過一件道袍、夜裡鋪蓋的一件被褥而已。他規矩每一ヶ月六遭出來托鉢、這是釋迦佛定下的規矩了。

もともとこの和尚はある寺の住職であつた。その寺は線香の火が絶えることなく栄え、多くの檀家が常に日用の必需品を寄進して、ひたすら供養を願っている。そのため、米や食料を買う必要は無く、寺の数十人の僧侶も、皆衣食は足りており、托鉢に出ることも布施を求めることもせずにやっていけたのである。これは菩薩のお加護にほかならない。しかしその和尚は大徹大悟の善知識で、過去や未来の事どもを了解して、世の中を見抜いており、人情が水と同様すぐにさめてしまうことを知っていたので、昔から山門の中か外かを問わず、常に古い着物を着て、良い着物を着ようとはしなかった。かりに檀家が着物を送ったり、銀子を送ったりしても決して手元に貯えず、銀子は日用品費に残しておく以外、残ったものは多少に關

らず、すべて貧民救済に使い切り、着物も自分が凍えぬ分以外、残りはすべて人に与えてしまう。方丈に行っても、家財は何も無く、一着の法衣と、寝る時に被る布団があるのみ。彼の決め事は、毎月六回托鉢に出るというもので、これはお釈迦様が定めた決まりであった。

【注】

世態「態」水一樣冰冷不過

「世態」は浮世の世情、特に移ろいやすく淡泊な人情を指している。

送把人家穿

「把」は「給」に同じ。Ⅱ（一）の注を参照のこと。

（三）他這樣品行好、所以這個朋友十分歸依他。當下看見這和尚來、連忙出來迎接、請他客廳來坐、請他吃早飯、買了幾樣時新好素菜、安排幾碗、十分管待。那和尚又沒有□（『唐話』作推）辭、儘着食量吃飽了。後來一頭吃茶、一頭把滿家中的內眷們、都叫攏來講經、把他們聽。那和尚說道、「貧僧如今勸備們一句好話。大凡做一個人、不論僧家俗家、要戒煩惱、々一惱、老一老、笑一笑、少一少、不要多煩惱」。那時節他家裏大兒子、把和尚所托的鉢盂、劈手搶奪了、一拳打碎了。那和尚看見這個光景、沸翻應天、亂說亂罵、大惱起來。那兒子說道、「師父剛纔勸我們不要煩惱、這一句說話、說也不會說得完、為什麼自己不警戒、這樣大惱」。和尚回覆說道、「別樣事情可以忍耐得住、這鉢子是我的姓〔性〕命相關的了、怎麼耐得」。豈不是好笑麼。

彼はこのように品行に優れていたのです、この友人も心から彼に帰依していたのである。ちょうどその和尚がやってくるのを見て、慌てて飛び出し迎え入れ、彼を客間に通して座らせ、朝食を食べていただいたという。何種類かの新鮮な上等の素菜を買い、何碗も整えて、非の打ち所のない歓待ぶり。その和尚も辞退することなく、食べただけおなか一杯食べた。後

でお茶を飲みながら、家中の女性たちを呼び寄せて説教をして彼らに話して聞かせた。その和尚の説法にいう、「私めは今あなたがたに良い話をしてあげましょう。およそ人間は、出家在家を問わず、煩惱を戒めねばなりません。ちょっと腹を立てればその分歳をとり、ちよつと笑えばその分若返る。腹を立ててばかりばかりはいけません」と。まさにその時、彼の家の長男が、和尚の托鉢に使う鉢をやにわに奪いとり、振り上げたかと思うと打ち壊してしまった。和尚はそれを見て、怒髪天を撞き、ことばの限り罵って、大層な剣幕であった。その子はいった、「和尚様はさつき私たちに煩惱は禁物とおっしゃいました。その話もまだ終わらないうちに、どうしてご自分ではそれを戒められないで、このように激怒されるのですか?」と。和尚は答えて行つた、「別のことなら耐えもするが、あの鉢は私の命と同様のもの、どうして我慢できよう」と。何とかしな話ではないか。

【語注】

儘着

くにかせる。『桃花扇』投轄「儘着狐狸縱橫虎咆哮、這威風何須要偏嚇」。

叫攏

呼び集める。

把他們聽

ここでの「把」も介詞「給」に同じ。Ⅱ（一）の注及びⅢ（一）の注を参照のこと。

惱

腹を立てる。

劈手

そのまま。すばやく。『紅樓夢』第九五回「鳳姐見賈璉進來、便劈手奪去、不敢先看、送到賈母手里」。

不曾說得完

「不曾」は現代語の「没有」に相当する否定詞。「說得完」は可能補語。話し終えることができる。直後の「忍耐得住」も同じ。

VI 「江戸の浪人」

(一) 前遭江戸地方有一个吃錢糧的人、生得人財高大、有七八尺長短身材、力氣大得狠。他一包兩包米抬起來、只當得拿一寸灯心艸鍊一般、面不改色、輕々兒、抬將起來、不費一毫氣力。譬如一隻手提着一包米、望半空一丟、々將上去、那米包騰地起來、從半空中滾將落來得時節、不把他落地、伸出手來接住了、不慌不忙放在地上。爾說力氣大不大。這樣力氣高強、所以輪鎗刀、使棍子、竟沒有一個人敵得他過。他往常替人較量兵法、使棒子的時節、兩ヶ交手、鬪不到四五合、馮爾怎麼樣兵法精通的人、也抵擋不住、已先賣个破綻走了去。他不但是會使棍子、騎馬射箭、挺鎗輪刀、十八般的武藝、都學得熟閑、勝過人家。好不勇猛、真个萬夫不當之勇的了。他不知有什麼過失被王家革了職事、退了錢糧。不在衙門、在街上租了一所狹窄的小房子居住。他原來做人正經、不肯奢華、往常自己身上穿□(『唐話』缺)得(的)衣裳、口裏吃的東西都是平常。一厘一毫也不肯豐富、十分省儉。因為手裏略覺有些私蓄、當下沒了錢糧、更加省用、秤柴而爨、數米而炊、不冷不餓過日子。不覺光陰似箭、過了兩年、那手裏積蓄的私房、漸漸地消乏起來、又過了一年用得精光了、分毫也沒有。不過留得几ヶ空紙包而已。

先ごろ江戸に俸祿で飯を食っている人がいた。生まれつき立派な体格で、七八尺もの大男、おまけに大変な力持ち。彼が一俵二俵の米をかつぐ時には、まるで一寸の灯芯や花切り鍊を持つように、顔色も変えず、軽々と持ち上げると、些かの気合も使わない。たとえば一本の腕で一俵の米を持ち、空中にぽいっと放り、放り上げると、その米俵はぐんと飛び上がり、中空からもんどり打って落ちてくる時、それを地面に落ちさせることなく、手を伸ばしてそれを受け止めて、慌てず騒がずそれを地面に置く。どうだ、力のほどが大きいの大きくないのといったら。この様に力が強いので、槍や刀を振り回したり、棍棒を使っても、彼にかなう者はいない。彼は昔から人と兵法や棍棒使いを競い合う時、双方が手を合わせると、四五手も戦わない内に、どんなに兵法に精通した人間であっても、防ぎようがなく、先に破綻を生じて逃げてしまう。彼は

単に棍棒を使うのがうまいだけではなく、流鏑馬、やり刀、武芸十八般、すべて熟練していて、人に勝る。何と勇猛なこと、まさに天下第一の勇者である。どういう過失があったか知らないが、ご公儀から仕事改めがあり、俸禄も取り上げられてしまい、役所内ではなく、城中に狭い小屋を借りて住むことになった。彼はもともとまっとうな人間で贅沢を好まず、昔から身に着る着物、食べる物は皆普通のものであった。一厘一毫たりとも豊富であることを善しとせず、大層質素儉約であった。だから手元には些かの貯えもあった。俸禄が無くなると、さらに儉約にたいそう勤め、薪は測って焚き、米粒は数えて炊き、寒くないよう餓えないように日を過ごしていた。光陰矢のごとし、気がついたら二年が過ぎ、手元に貯えたへそくりも徐々に消費され、さらに一年がたつとすっからかんになって、全く底をついてしまい、残っているのは幾つかの空の紙包みだけとなった。

【語注】

吃錢糧

「錢糧」は田賦を指す。顧炎武「錢糧論」上「今之言賦必曰錢糧。夫錢、錢也。糧、糧也」。江戸城の扶持に頼って生活をしていた侍、ということであろう。

抬將起來／丟將上去／衰將落來

動詞（抬・丟・衰）＋將＋複合方向補語（起來）の形式。中国では元明以後発達した句式である（劉堅・江藍生等『近代漢語虛詞研究』p.80～81）。

敵得他過

動詞「敵」の代名詞目的語と方向補語・可燃補語が同時に用いられた例。「彼に優ることができる」。

替人較量兵法

ここでの「替」は共同の意を表し、「和・共」などに相当する。

抵擋

防ぐ。

十八般的武藝、都學得熟閑

似た言回しが『唐話使用』六にみえる。「十八般武藝、學得十分精熟」。

勝過人家、好不勇猛、真個萬夫不當之勇的了

これも良く似た表現が、『唐譯便覽』一【チ字部】に見られる。「膂力過人、有萬夫不當之勇 チカラ

人ニスギ、万人アタリガタキノ勇アリ」

正經

まっとうである。

因為

「因此」に同じ用法。

(二) 自古道、坐飲海乾、坐吃山礮、只有裏水出去、外水不進來。縱然有了万々貫的家私、又是怎樣慳吝、那里當得起、自然用得乾淨了。他原是刀鎗堆裏生長的武夫、不比得庶民人家。伏羲疎財、義氣沈重、並不會開口替人家討ヶ半文錢、雖有几个旧相與、也不肯去借艮子。後來把滿家中的家伙、傾籠倒箱、都賣完了。寸土俱無、連樓下所鋪的席子也櫟「搗」開來、當掉了他。這樣窮到底、但是不尷不尬的勾當、不但不肯去做、不會借了人家的銀子、又不肯賒了人家的東西。他的意思、寧可窮、窮的「得」乾淨、不要窮的不乾淨、替人家討什麼衣服、縱或救得一時的飢餓、究竟不濟事。窮到這樣的地步、必竟是一死。寧可死、如何把父母的遺體點污了。做了詐路的事情、被人家咲破了、自古道、虎死留名、看得義氣是天一樣大、倒把姓「性」命看得不在心上、意思要餓死的了。後來果然一家的人好几天不吃飯、餓壞了、駢頭而死。那時節東鄰西壁的人家、都來把家中一看、並沒有一件東西、只有一个匣子。打開了鎖、裡頭有了三件東西。餓死也不肯賣、好短々秘藏在那里。儻說什麼東西。頭盔衣甲、腰刀一口、這是武夫要緊的軍器、所以死也不落手。可感々々。

昔から言う、「坐して飲めば海をも涸れ、坐して食らわば山をも崩る」、「中の水は出て行くばかり、外の水は入ってこな

い」と。たとえ幾万貫もの家財があろうと、またいかに吝嗇であろうと、どうして防げよう、当然きれいさっぱり使い切ってしまうのだ。彼は本来刀槍の積み重なった場所に生まれ育った武士で、一般民衆と比べることはできない。義に伏し財には無關心、正義感は厚く、いまだ嘗て人に半文の金もねだったことはなく、何人かの知りあい是有つても、金を借りに行くとはしなかった。後に家中の家財を、洗い浚い^{ぎらい}売り払って、わずかの土地もなくなり、下に敷いていたござも引き剥がして質に入ってしまった。このようにとことん貧乏になつても、胡乱な事は、請け負おうとしないのはもちろん、人の金を借りたり、人の物を掛け売りしようとしなかった。彼の考えでは、寧ろ貧しいなら、きれいに貧しい方がいい、汚い貧乏にはなりたくない、人に何らかの衣食を物乞いすれば、たとえ一時的な餓えは救えても、結局は解決にならない。これほど貧乏なら、きっと死んでしまふだろうが、たとえ死んでも、どうして父母の遺体に泥を塗れようか。悪事を働くと、人に笑われてしまふ。昔から、「虎は死して名を残す」という。義氣を天のように大きく考えると、却つて命を氣に留めず、餓死をも辞さぬ氣配である。後に實際一家の人間は、何日も飯を食わず、餓えて体を壊し、頭を並べて死んでしまつた。その時、東西両隣の人が、皆やってきて家の中を見てみると、何も無いなかに、一つの箱が有つた。鍵を開いてみると、中には三つの物が收められていた。餓死しても売ることを承知せず、秘藏していたのであつた。一体なんだと思ふかね。鎧兜と、脇差一振り、これは武家の肝心の兵器である、だから死んでも手放そうとはしなかつたのだ。何と感動的な話だろうか。

【語注】

坐飲海乾、坐吃山崩

働かないで消費するばかりだと、どんなに財産が有つてもいつかは無くなる。『儒林外史』第十二回「落後他父親死了、他是個不中用的貨、又不曾種田、又不曾作生意、坐吃山崩、把些田地都弄得精光」。

替人家討ヶ半文錢

この「替」は、現代語では「跟・向」に相当する。

櫟「搗」開來 「櫟」は「搗」の誤りであろう。現代呉語で「壞す」意で用いられる「搗」がこの場合最も相応しい。

不尷不尬

「尷尬」に同じ。この場合「不」は否定の意味を持たない。行動が悪辣で怪しいこと。『水滸傳』第十回「大姐、這兩個人來得不尷尬」。

賒

借りる。

好短短

「好端端」に同じか。きちんと。

VII 「福州語・漳州語・官話」

(一) 大凡學了福州話的人、舌頭會得掉轉、不論什麼話都會講。官話也講得來、漳州話也打得來。壁〔譬〕如先學了官話、要你講漳州話、口裡軟頭軟腦、不象ヶ下南人の口氣。先學了漳州話、要備說官話、舌頭硬板々、咬釘嚼鉄、像個韃子說話一樣的、不中聆。這個正真奇得狠。唐人是生成的、自然如此、連日本人也是這樣了。若是外江人遇着下南人、或者見了福建人、講官話自然相通。原來官話是通天下、中華十三省都通得了。童生秀才們要做官的、不論什麼地方的人、都學講官話、北京朝廷裏頭的文武百官都講官話。所以曉得官話、要東就東、要西就西、到什麼地方去再沒有不通的了。豈不是便當些。但是各處各有鄉談土語、蘇州是蘇州的土語、杭州是杭州的鄉談、打起鄉談來竟不通、只好面々相覷、耳聾一般的了。

およそ福州語を学んだ人間は、舌がうまく動くようになるので、どんなことばも話せるようになる。官話もできるし、漳州語もやってのける。もし最初に官話を学んでしまえば、漳州語を学ぼうとしても、口がしまりがなく、下南人の口振りは

似ても似つかない。先に漳州語を学ぶと、官話を話そうとしても、舌がかちかちになっていて、釘鉄を嚙むような具合で、韃靼人が話すことばのように聞くに堪えない。これは本当に不思議なことだ。唐人は生まれつきだから当然そうもなるだろうが、日本人まで同様であるとは。もしも「外江人」が「下南人」にでくわす、もしくは「福建人」（福州人）に会ったとしても、官話を話せば当然通ずる。もともと官話は天下に通じ、中華十三省すべてに通じるものなのだ。童生秀才たちで官位につこうと願う者は、どの地方の人間であっても、みな官話を学ぶのだ。北京の朝廷の文武百官はみな官話を話すのだから、官話に通ずれば、東と思えば東、西なら西、どこにいつても通じないことはなく、何と便利なことであろうか。しかし、土地にはそれぞれお国言葉がある。蘇州には蘇州のお国言葉、杭州には杭州のお国言葉があつて、方言を使うとちつとも通ぜず、顔を見合わせるばかりで、聾者と同じことになってしまう。

【語注】

軟頭軟腦

だらけてしまりのないさま。「鬼頭鬼腦」という用例が後出するが、そこと併せ「A頭A腦」という形で「A」のひどさを強調する表現と考えることができる。

口氣

口振り。『紅樓夢』第七十回「這聲調口氣、迴乎不像蘅蕪之體、所以不信」。

硬板板

硬直している。

韃子

「韃子」はこの場合、清朝を開いた満人など北方異民族を広く指すのであろう。

不中聆

聞くに耐えないの意か。

奇得狠

「〽得狠」は、程度が甚だしいことを示す程度補語。現代中国語では「很」字を用いる。『唐話類纂』卷二「四字話」「可惜得狠了 ヲシイコトシヤ」

郷談土語

なまり、方言。『水滸傳』第六十一回「亦是說的諸路郷談、省的諸行百藝的市語」。

【解説】

連日本人也是这样了

この発言も興味深い。通事として唐話を修める自らを、唐人の子孫ではなく、日本人と表明している例である。Ⅰ（三）の「日本語は生成的」及びⅡ（三）の「晚生會講的是日本話了」と相通ずる意識として重要である。

原來官話是通天下都講官話

雍正六年、特に広東・福建らの官員たちにしつかり官話を習得させるようとの上諭が発せられ、それを受ける形で、広東・福建両省内に正音書院が設けられ、官話ができないものには受験資格を与えないという政策が取られた。この間の事情については、高田時雄「清代官話の資料について」（『東方学会創立五十周年記念東方学論集』汲古書院、一九九七年）参照。

便當

『唐話類纂』卷一「便當 カツテガヨイ」

Ⅷ 「旭如和尚の述懐」

原來言語不通十分不便。所以唐僧到長崎來做三寺的住持、身邊跟隨的人話說得不通、不明不白、要長就短。分付徒弟們做什麼事情、唐僧說得話聽不出、陰錯陽差、做得顛倒了。只當隔靴搔不著痒處、好幾遭落空了、及至弄手勢把他看、方纔搔着了。豈不是厭煩。因為唐僧是各个想要回唐、沒有一ヶ不思鄉的。原來僧家是食録〔祿〕有方、到處都是自己的故鄉了。況且通得佛經、看破世態炎涼、曉得一死一活的道理、比在家人自然清高一分、難道同凡夫肉眼一般、只管貪生怕死不成。因為言語不通、心腸裏頭有什麼酸甜苦辣的事情、也講不得出口、弄得滿肚子昏悶了、沒處出氣。因此上只管思鄉了。前遭南京寺

裡的旭和尚說一ヶ咲話。他說道、我在唐山的時節、做人朴實、心腸倒也畢直、沒有鬼頭鬼惱〔惱〕。聽見人家的話、不論好歹、都是聽信、惡猜的念頭是一點也沒有的了。所以動不動被人家哄騙了、借去了衣服穿壞了、或者被人搶奪了良〔銀〕子、好幾遭吃虧了。到東洋來、一個好心腸倒變做蛇肚腸了。為什麼呢。兩邊說話不通、因為看見人家發惱〔惱〕、只說道是罵我、看見人家咲起來、只說道是咲我、疑々惑々、只管惑猜了、可不是咲話。這ヶ話雖然取咲說、倒是實話了。

そもそもことばが通じないというのは、大變不便なものだ。だから長崎にやってきて唐三寺の住職を勤める唐僧は、おそばに仕える人間と話が通じなければ、チンプンカンプンで長いものも短くなってしまう。お弟子たちに何かを言いつけるのにも、唐僧の話が聞き取れなければ、とんちんかんのあべこべになってしまう。靴の上から痒いところに手が届かない時にも、何度も空振りをして、手振りで示してやってようやく痒いところに手が届く。なんとまどろっこしいことか。だから唐僧は、みんながみんな唐に帰りがたがって、一人としてホームシックにならないものはいないのだ。もともと出家は生活に困るわけではなく、どこに行ってもそこが自分のふるさとというものだ。ましてや仏典に通じ、世の人情の移り易さもお見通しで、生き死にの道理をわきまえているのだから、在家の人間と比べ一步達観していられるはずだ。それなのに、無分別な凡夫の肉眼と同様、ひたすら生を貪り死を怖れるなどということがあろうか。ことばが通じないために、心の中に何か辛酸を嘗めることが有っても口に出せず、お腹が不満でふたがれても氣を晴らすこともできない。そのためひたすら故郷に帰りたいと思うのだ。先ごろ、南京寺の旭和尚が笑い話を話された。言われるに、「私が唐にいたころは、性格も素朴、心根も真つ正直で疑念というものはもたなかった。人が話しているのを聞いても、良い悪いにかかわらず、すべて真に受けて、疑おうという気持ちは一切起こらなかった。だからややもすれば人に騙されて、貸した着物は破かれたり、時には人に金を盗られたり、何度もひどい目にあったものだ。東洋に来てからは、このようないい心根が逆にへびのような根性になってしまった。どうしてかという、双方で話が通じなくて、人が怒っていると、ともかく自分の悪口を言っていると思い、人が

笑っていると、自分が笑われていると思うので、こんなふうにな人の顔色をうかがってひたすら疑い深くなってしまう。何て滑稽なことか」。この話は笑い話に借りてはいるが、まさに事実を伝えているのだ。

【語注】

不明不白

『唐話類纂』卷一「不明不白 キツウラチアカヌ」。

陰錯陽差

あべこべで食い違うこと。

落空

空しく終わる。手応えがない。

把他看

給他看。「把」給」に関しては、Ⅱ（一）の注を参照のこと。

因為唐僧……

この「因為」も「因此」と同じ用例。

世態炎涼

人情の移り変りの速いことをいう。『鏡花縁』第八十五回「這句『錢多處前、錢少居後』、令人聽了、

想起世態炎涼、能無慨歎」。

凡夫肉眼

並みの眼力、見識が無いこと。

因為言語不通

本資料で唯一「因為」の通常用法と考えられる、原因を導く用法である。

心腸

根性、こころね。『水滸傳』第六十七回「哥哥只管讓來讓去、讓得弟兄們心腸冷了」。

出氣

発散する、溜飲を下げる。『朱子語類』卷一一二「論官」「若其人昏濁、則害貽一路、百姓無出氣處、

故又須略重判官之權」。

畢直

率直に同じ。

鬼頭鬼惱〔腦〕

「鬼」のような心の人。『三刻拍案驚奇』第二十回「巢氏有兄弟巢大郎、是一個鬼頭鬼腦的人」。

哄騙

だます。『紅樓夢』第四十八回「也未好意思哄騙他的」。

動不動

ややもすれば

東洋

日本を指す。

發腦

腹を立てる。「發惱」も同じ。

【解説】

唐僧到長崎來做三寺的住持

唐三寺は、興福寺（南京寺）・福濟寺（漳州寺）・崇福寺（福州寺）の三寺。ともに七代まで唐僧が住持を勤めた。興福寺は、江西省饒州出身の真円により、一六二三（元和九）年開基された。場所はもと、初代唐年行司の歐陽雲臺の別荘であったという（李猷璋『長崎唐人の研究』第五章）。福濟寺は、一六二八（寛永五）年、泉州府出身の覺海により開基。崇福寺は一六二九（寛永六）年頃、福州人超然により開基。

南京寺裡的旭如和尚

冒頭で述べたとおり、南京寺（興福寺）の五代住持旭如和尚のこと。正徳元年（一七一）から七年在位した。このエピソードが、旭如和尚在席から遠くない時期に記録されたものと考える根拠である。

（完）

(付記)

昨年、長崎県立長崎図書館に唐話・唐通事関係資料の調査に赴いた際に『唐通事心得』を詳細に調査し得たことがきっかけで、その重要性に気づき、本訳注稿を作成することとなった。本資料の閲覧については長崎図書館郷土資料室の方々に大変御世話になった。心よりお礼申し上げる。また、本資料の一部(I・II)は今年度文学部・文学研究科特殊講義にて取り上げた。その部分の訳注作成には、受講学生諸氏の報告を参照した。また、神戸市立外国語大学佐藤晴彦先生より教示を受けた箇所がある。併せて謝意を表す。